

金門光波を子会社化

マーケティング

レーザー技術とシナジー

アルコニックスグループで非破壊検査、マーク印字装置の国内最大手のマーケティング（本社＝東京都大田区、西本圭吾社長）は、7月1日付でレーザー装置の製造・販売などを行う金門光波を子会社化した。金門光波のレーザー技術に同社の営

業や経営管理のノウハウを組み合わせることでシナジーを見込む。半導体産業や医療分野などの成長産業を向け先とするニッチトップ企業を傘下とし、多角化戦略を推進。サーキエラー・エコノミー（循環経済）に貢献したグループ成長につなげ

る。金門光波はHeCd（ヘリウム・カドミウム）レーザーやUVファイバーレーザーなどを手掛ける装置メーカー。主力のHeCdレーザーは波長325ナノメートル、出力は3180ミリワットという仕様

だ。325ナノメートルの安定的な波長を出せるのは世界でも金門光波が唯一。独自のガラス加工技術やカドミウムの注入技術により、需要を独占している。主な向け先は光の波長の違いを物質の評価に利用するラマン分光



法を用いた測定器や顕微鏡だ。2014年にノーベル賞物理学賞を受賞した高輝度青色発光ダイオードの開発にも、金門光波製のHeCdレーザーが使用

されたという。ただ、特定の製品に偏れば代替リスクもある。そのため、16年に新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）のプロジェクト

①と上製品のHe-CdレーザーとUVファイバーレーザー

冷卻強化により出力を300ミリワット程度まで高めることも可能という。レーザー加工分野において、精密さやピットが求められる3

にのUVファイバーレーザーを開発。波長3180ナノメートル、出力100ミリワットという仕様。波長はHeCdレーザーに近いものの、光学部品の変更でほかの波長へ対応できる。装置のサイズが小さくなる

ことを特長だ。今後マーケティンググループとして金門光波製のレーザー製品の新用途を開拓する構え。市場成長が見込まれる窒化ガリウム（GaN）や炭化ケイ素（SiC）など、次世代パワー半導体の検査用途にも適

Dプリンター向けの活用も期待できる。用途開発を進め、来年末には上市に漕ぎつけた考え。金門光波の藤本貴司社長は「ニッチかつ競争力のある技術をベースに、唯一無二の製品を提供できる会社を作りたい」と意気込む。

これまで培ってきたノウハウを注入し最先端化を進める。社会に貢献できる技術を確認したい」と話す。

性がある。販売面では同社やアルコニックスの販売網を活用。グローバル展開を見据える。同社は事業性と社会課題の解決を両立したビジネスモデルを目指している。M&A（合併・買収）を通じた技術継承を推進。エレクトロニクスや医療など成長分野への参入を加速させている。西本社長は「マーケティングが